

こんにちは。囑託員の村上です。昨日、青森地方気象台が桜の満開を発表しましたね。この週末はお花見に出かけるという人が多いのではないのでしょうか。青森市の桜の名所の一つである合浦公園では明日から「青森春まつり」が開催されます。そこで、今回は合浦公園にある碑の中から石川啄木の歌碑をご紹介します。

岩手県出身である啄木の歌碑がなぜ青森市にあるのでしょうか。その理由を歌碑に刻まれた歌からみていきましょう。

歌碑に刻まれているのは歌集『一握の砂』に収録されている「船に酔ひてやさしくなれる いろいろの眼見ゆ 津軽の海を思へば」という短歌で、啄木が明治40年（1907）に岩手県<sup>しづたみ</sup>渋民村（現盛岡市）から青森を経由して函館へ向かったときのことを詠んだものです。



石川啄木の歌碑(合浦公園内)

啄木は明治39年4月に渋民尋常高等小学校の代用教員（資格を持たない教員）となりますが、翌年4月に免職されてしまいました。そこで、知人のいる函館で働くことを決め、5月4日、妹の光子とともに好摩<sup>こうま</sup>駅（岩手県玉山村、現盛岡市）から列車に乗りました。二人は夜の9時半頃青森駅に到着し、陸奥丸に乗船しました。津軽海峡では船酔いをする乗客が多く、妹の光子も苦しんでいたことから薬を飲ませたといひます。歌碑に刻まれた短歌はこの体験を詠んだものなのです。



歌碑の裏面にある解説

このように、啄木が青森から函館へ向かう船の中での体験を詠ったことを受けて、乗船した場所である青森市に歌碑が建立されたのです。

さて、合浦公園にある歌碑は昭和 31 年（1956）5 月 4 日、青森啄木会を中心とする歌碑建設委員会によって建立されました。歌碑に刻まれた短歌は光子の書で、「一生の思い出」であるからと何度も書き直したのだそうです。

歌碑の除幕式には光子のほか、啄木の娘婿、孫、ひ孫が参加しました。式では間宮秀樹（青森市の合唱指導者）が作曲した碑の歌（歌・八島けい子、伴奏・間宮昭佳）も披露されたそうです。除幕式に合わせて歌を作るとは、関係者の大きな喜びが感じられますね。

啄木の歌碑は合浦公園の中でも海に近い場所にありますので、ぜひ探してみてください。

※今回の内容は『東奥日報』昭和 31 年 5 月 5 日付、川崎むつを『石川啄木と青森県』（1974 年青森文学会）、『石川啄木全集 第五巻』（1978 年 筑摩書房）などを参考にしました。